
無限夜勤

ウィリアム・輝夫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無限夜勤

【Nコード】

N8387S

【作者名】

ウィリアム・輝夫

【あらすじ】

34歳コンビニ夜勤の男の独り言であり世迷いごとである。

第一話

これからダラダラと文章を書いてゆく予定であるが、最近わかったのは、自分はどうもそんなに自分語りをするのが好きではないみたいで、自分のことを書くこうとすると急に力が抜けてしまうのである。

ふわつとなつてしまって、私のことを書くといつても、私にはそんな大したものはないわけであるし、本当に、ない力を振り絞って、無理矢理書くのだとしても、限られたことしか書けないのである。

その限られたことにしてもどうしようもないことばかりで、そんなものをわざわざ紹介しても他の人のためにはまったくならないのである。

それでも、まあ、こうやって生きてきたわけであるから、少しでも何かを書けるかもしれないと、こうやってキーボードを叩いているが、本当にもうこれで何回、同じような逡巡をしているかわからないが、誓って、くだらないものにはかならないだろう。もう自己嫌悪の念がわきあがってきて、しょうがない。

では、何をするのが好きなのか、というところも困る問題で、最近は何もしない方がいいのだ。

ただ、ボーっと部屋の中で時間の過ぎるのを待つ。

これも立派な生き方ではないだろうか。

いや、一步譲って立派ではなかったにせよ、これこそが東洋的な、瞑想的な生き方であり、何もせずに時間の漂いに身をまかせる、これは基本的には、悪いことではないはずである。原始時代、人はみんな何もなきときはぼんやりしていたのではなからうか。せかせか常に動くのは農耕民族的な発想：いや、農耕民族にしても、冬は何もすることはなかった。一日の時間にしたら、すべて完璧には埋まっていなかったらう。となると昔の人は現代人よりもはるかに、ボーっとしていたのである。

下手をしたら、ボーっとするにも技術が必要なかもしれない。よりよくボーっとするやり方があって、同じボーっとしているのも、やり方によって、心が癒されたり、頭がリフレッシュされたり、ということもあるかもしれない。洗練されたボーっとし方というのがあるのではなからうか。それはかなりの確率であると思う。

私はコンビニの夜勤などをやって、時間を経過するのが昔は苦痛であったが、今ではそうでもなくなっている。昔、私は異様に頭の回転が速かったので、時間の過ぎるのが遅くて遅くて辛かったのであるが、今は気がついたら過ぎていく、何気なしに終わっているということが多い。もちろん、ヒマなときに、何か考え事をする、それでヒマを紛らわせる、という訓練もできているのかもしれない。だが、夜勤の最中に思いつくネタはどうも、熱すぎて、実用に向かないことが非常に多い上に、そのとき思いついたアイデアをすっかり忘れていくことも多い。でも忘れるということは、それほど大したことではないのだろう。

今、こうやって部屋にいるときに、指を走らせているときの方が、冷静になっているので、まだまじなことを書けるのだと思うが、今、ざっと自分の文章を読み返して、その無内容さに唖然とした。

この無内容さ、というか、この圧倒的な内容の薄さは何であろうか。

多分、便利になりすぎた文明が私の生命力というか、やる気を喪失させてしまったのである。今、無気力状態にあるが、これだけでも絶望で心が縮まっているということでもない。私はある意味ではすごく不幸であるが、ある意味ではすごく幸せなのである。そんな二律背反的な状況になっているのが今の私であり、ここまで読んでくれたら何となく私のこの思いもわかってくれた人もいるかもしれない。もちろん、そんな人がいたところで、私にしてもその人にして、も特に何の役にも立たないだろう。

第二話

朝、私は午前3時ごろに起きて、ベッドで寝ながらノートPCにイヤホンをつないで、ニコニコ動画の「朝まで生テレビ」を聴いていた。若者に未来はあるのか。ということのパネラーたちが論じていた。

もう未来は、どんどん労働の必要が無くなり、人間はその内、働くことができなくなる。というか、今にしても、本当は労働が必要ない。3パーセントぐらいが、生存に必要なものを作っていて、後は必要ないみたいなのを言っていた。

「コンビニなんて店員必要ないですよ」と言っている人もいた。

確かに必要ないといえば、必要がないし、今、外国人でコンビニの店員をしている人が多いという。無人コンビニとかもやろうと思えばできるのらしい。

面白かったのは、

「ぶつちやけた話、そもそも労働自体が必要ない」という意見さえあれば

「そもそもがみんな労働してはいない。

みんな遊んでいるだけだ」

という意見さえあった。

じゃあ、これから私がやろうとしていることは遊びなのか。と思った。でもそう考えればそうなのかもしれない。

など、いろいろなことを思いながら、午前10時くらいまで寝たりパソコンをしていた。それから、シャワーを浴びて、下着とパンツを履き、上に服を着て、外に出た。

線路の前に自転車置き場があつて、数ヶ月前まで繁茂していた草には、菜の花が咲いていた。おひたしとかにして食べられそうだが、もちろん、そんなことはしない。

私は自転車に乗って、細かい通路を抜けて、大きな街道沿いに進む。高校のグラウンドの向こうでは日が輝いていた。清しい。

それから細い坂道を上り、多分、佐倉街道という名前の街道を横断して、工場やパチンコや他のコンビニなどの脇を通って、右に曲がってしばらく進むと、空き地のある大通りの前を、左に曲がって、理容店、新聞などを横切って、目的地のコンビニに着いた。

正直、眠い。

目を細めて、ドアを開けて店内に入り、手をバタバタするような感じで、ドカドカ歩き、スタッフルームに行く。

第三話

レジには、二人の奥様の店員がいて、YさんとUさんとしておう。Yさんは長身であり、Uさんは多分、女性としては中背であったが、私と比べると小柄であった。

11時になってレジが二つあるので私はレジ2（向かって右側の方のレジ）を担当して、揚げ物を揚げたりしたり、お客をさばく。Yさんが、この時間になると、コピー機の清算を始める。

お客の混雑がやってきて、

「いやあ、何で今日混むんでしょうかね」

というUさんが笑った。

「そりゃ、ゴールデンウィークだからでしょう」

「あ、そうかそうか。」

もう曜日のがんがわけわからなくなっている。

そりゃ混みますよね」

「何か、戸田さんが店に来たとたんに混みましたよ」

「はあ、そうですか」

私は、から揚げ棒を揚げる準備をしながら答えた。

そういえば、別の店でも、私がレジに入ると人がすごく来るといふようなことをいわれた気がする。これは関係ないかもしれないが、細木数子の六星占星術によると、私は火星人プラスであり、水商売などの接客にすごく向いていて、特に、カウンターに水道などがあった場合、鬼に金棒みたいなことを書いてあった。実際、水道はあったが、鬼に金棒だったかはわからない。現実的に考えれば、私みたいな又ボーっとした大男がレジをやるよりも、多分、女の子がレジをやった方が客が入るだろう。

それから色々あったが、私は丁寧にお客をさばいて、決まっている時間に掃除などをした。

Uさんと一緒にスタッフルームで作業しているときに、私は煙草

のことを話す。現在、煙草は震災の影響で止まっている。それはどうしてかというと、茨城に煙草農家があつて（群馬か栃木だったかもしれない）、その農家に震災が直撃したからだという。その土地では日本の煙草の50パーセントが作られていたらしい。おかげでその農家の人たちは、大打撃を食らい、その前にも、税率を上げていて、儲けが減ってしまったために、やる気がなくなっていて、もう辞めようかな、と思っている人もいるらしい。

私はこういう細かいことを滔々と述べてから、

「……って、Mさんが言っていましたよ」

と言った。

するとUさんに受ける。というのも、Mさんという人はそういう講釈を延々とする人であつて、どうでもいい細かいことを長々と話すことで有名だったからである。

時間はあつという間に過ぎてゆき、2時ごろになつて事件が起こる。

「あああ、ひよつとしてお嬢じゃない？」

とYさんが叫んだ。

「ええ、ひよつとして？」

つて話になつて、二人は狂喜した。

どうやら大学時代の同級生がこんな大学とは遠いところで再会したらしい。二人は少し話して、

「じゃあ、またね」

とそのお客は去る。

「いやあ、感動ですよ。」

彼女は『千代田区のお嬢』といつてすんごく可愛かつたんですよ。でも一目見てすぐにわかつたなあ。やっぱり変わらなかつたよ」

と感激していた。

第四話

それから私はお客を相手しながら、この小説、『無限夜勤』のことを考えた。そもそもこの小説は夜勤のことを書くこととしているのに、今私がやっているのは、昼勤であった。

まあ、それはそれでいいとして、私は、競馬新聞などを畳んだり、いろいろな作業をしていると、暇になったので、うさんが話しかけてきた。

「戸田さんって休みの日って何しているんですか」

「趣味とかですか」

私は考え込んでしまう。

「うーん。」

旅行かな。

俺、青春18切符とかで旅をしたことがありますね」

「えええっ！」

青春18切符って確か、20歳未満じゃないと使えませんよ」

「ええ。」

そうだったっけ」

私は思いつきで旅行と言ったのであるが、どうやらかなり前のことを話しているようであった。今、34歳だからかなりチンプンカンプンなことを話していることになる。でもうさんの言うことは本当であるうか。確か20歳過ぎても使っていた気がする。それは記憶違いかもしれない。

実はキセル乗車で、宇都宮近くの無人駅まで行ったこともあるが、そんなことは話してもしようがなかった。

「うーん。」

家でパソコンやってますねえ」

と本当のことをいった。

別に嘘をつく理由はなかったのであるが、何となく旅行とでも言

つておこうかなと思ったのである。そっちの方が無難に思えたのだ。でも、意外にもパソコンに食いついてきた。

「ええっ。」

パソコンやっているの。

ちなみに英語とかできますか」

「あっ、最近、俺、英語を勉強しようとしているんですよ。テレビで、映画とかやるときに二ヶ国語の副音声にして聞いていますよ」
そして聞いて10分くらいですぐに寝てしまうことは話さなかつた。

そこから話は広がって、どうやらUさんには外国のマイナーですがく好きな俳優がいて、その人のツイッターの内容を知りたいらしい。でも、英語がわからないから、勉強して英語がわかってきたら、教えて、といつてきた。

「ああ、いいですよ」

「あたしも、ちょっとわかるんだけどねえ。」

あと、彼ら、よく笑うでしょう。そこがわからないのよ。

何が面白いというのか」

「あ、あれですか。」

あれは何でもないですよ。

日本でいったら『ドリフの大爆笑』と同じですよ。

本当にドリフそのまんまですから」

「えええ。」

あのお方がそんなドリフみたいなギャグで笑うの」

「そうですねよ。」

向こうのギャグって、我々、日本人が聞いたら驚くほどベタですよ。

ドリフなんて、だって、外国人に見せたら目茶苦茶受けるんですから」

「いやだ。」

それは嫌だわ。

何かイメージが」

「でもそんなものですよ」

ということを話し、Yさんが休憩が終わりレジに入ろうとすると、私は定時になっていないのに帰ろうとして笑われる。

「あ、すいません。」

ついついYさんがくると、『あっお帰りだ』って体が動いちゃうんですね。普段そんなシフトなので」

それから、退勤登録をして、帰りに弁当を買うときに、二人がお客に対して

「ありがとうございます」

といったので私服を着ている私も

「ありがとうございます」

と釣られて同じ挨拶をしたら笑われた。

しかも、弁当を

「暖める」

とっておいて

「あ！

暖めない！」

とすぐに否定したら、また笑われた。

「もう何だろう。」

俺、無意識で生きていますね。

すみません」

これじゃあ、俺自身がドリフじゃないか、と思いながら自転車に乗って家に帰ったのだった。

第五話

何だかまるで私がこの生活をして自足しているように思えるかもしれないが、別にそんなことはなくて、私はどこか自分をバケツにたとえると、底の穴が抜けてしまったような気になっているだけだ。

私だって今の状態から頑張れば何かはできるかもしれないが、それほど、頑張ろうという気もないというか、まあ、実はこうやって文章を書いているのが頑張っているのであるが、これが認められる可能性はそんなにない。だとしたら他のことをすればいいのであるが、私はこうやって小説以外に何かをしたら、何があるだろうか。

- 1 ゲームを制作する。
- 2 「ルールブリタニア」を歌えるよう練習する。

真剣に考えるとこの二つになる。

1 は、私は昔からTRPG（サイコロをふって会話でやるRPG）をやっていたので、好きなのであり、一応、暖めている案はあるが、多分、完成したところで個人の趣味の域を出ない。ヒットするとか金が入るとかまずないだろう。

2 にしても、これはイギリスの第二の国歌みたいな歌であるらしいが、それが斉唱できたところで何になるだろうか。シャワーするときとか、カラオケ：にしても、他人に聞かせてもしょうがないので、一人でカラオケするときしか歌えない。

しかも多分、私は一人カラオケはもう多分、一生やらないだろう。一回やったことがあるのであるが、しかも八時間近く一人で歌っていたのだが、帰りに

「あ、これって狂人だ」

って気づいてしまったのである。

これはやばい。これを延々やっていたら多分、狂ってしまうというのは薄っすらとわかったのだ。他の人はないかもしれないが、私は八時間平気で一人で歌えてしまう人間であるから（多分、こんな人間は少数派である）わかるのである。ここから先は、私にとってはレッドゾーンだと。

もっともこうやって一人で文章を書いていることもかなりレッドゾーンなのだ。何で私が小説にしようとしたのかというと、枠を設けないと、多分、狂気の人間の一人語りになってしまうので、小説ということにしようとしている。そして小説となるとどこか悲劇的構造を用意しなくてはいけないが、最近、そういうのも面倒になってきている。

それもこれも多分、私が人生の敗者だから悪いのかもしれない。私が人生の勝者だったらもっと楽しいことを書けただろう。もう私の未来なんてものは、ホームヘルパーになるか、個室ビデオの店員になるしかないのだ。もちろん、その二つ以外にも他にもあるだろうが、どうも私はそう考えている。しかし、それも嫌なので、私は今、踏みとどまっている。

今、まるで、ホームヘルパーが人生の敗者みたいなことを書いてしまったが、そうではなくて、私にとってそれほど望ましくないの、今は別のことをするということであり、そんな私はやはり自分を人生の敗者だとは思っていない。そもそも私は、謙虚さを装っているが、実はちっとも謙虚ではなくて、自分は何でもできると思い込んでいる。

もちろん、これは楽観的な思い込みであり、願望、妄想でしかない。となると、私はすでにレッドゾーンに踏み込んでいるのだろう。自己認識においてはレッドゾーンなのだ。いや、下手をするとこれは追い詰められている私のギリギリのプライドなのかもしれない。

第六話

「だから、そのね」

バンダナを頭に巻いた私の部屋の隣に住んでいる年齢は50歳くらいの下川が、私の部屋で鍋をしながら答えていた。彼は、学がある人で、どこかの大学の助教授をしているらしいが、変人なので、この貧乏なアパートに住んでいた。

「あつ。」

何ていうのかね。

まあ、一方で、君がレッドゾーンにいる。

つてのは事実だと思うんだよ。

でもね、じゃあ、他の人がレッドゾーンにいないのか。

という問題があるんじゃないかな」

「へえ。」

そうですか」

「ことによると、みんな実はレッドゾーンにいてだね。それを隠蔽して、必死になって別のことで、騒いでいるってのが世間なわけでしょう。みんな本当はどこかが不安なわけよ。それは君だけじゃないの」

「あつ、でもそれはわかりますよ。」

何たって地震列島日本なわけですから」

「一番いいのはね。」

「この国から引越すことですよ。でも、ほとんどの人たちは移動しようとしなんでしょう。これってどう思う？」

「狂気ですよ」

「ああ、まあ、論理的に考えるとそうですね」

「だから、まあ、こんなことはみんな昔から知っていたんだけどね。結局、生きるつてのは狂気の沙汰なんですよ。」

「正気な人間はみんな死んでますよ」

「そうですか」

「芥川龍之介なんて、彼は一人だけ正気になつて死んだんじゃないかな。多分、文学について、突き詰めて、突き詰めて、突き詰めたんだよ。で、そこで正気に返つたんだよ」

「うーん。でも、正気に返つて死んじゃつたらどこでその正気を生かすんですか」

「正気つてのは生かすものじゃないからね。すべて土台が、狂気つてわかつたら、いたたまれないよ。ああ、死のうって思うんだらうね」

「ちなみに下川さんは死なないんですか」

「死なないねえ」

「えっ…でも」

「あのね。」

だから、これつて難しいんですよ。

いつでも死ぬる、つてわかつたら、でも生きてやるうつてなるしかないわけで。そりゃ死ぬつてのは正気かもしれないけど、その正気を生かす場合は、この世にはないのね。この世自体が狂気なんだから」

「じゃあ、我々はその狂気を引き受けて生きようつてことですかね」

「そうじゃないんだな。」

いつ死んでもいいんじゃないの。

でも、死んだ先がどうなつていいるかは誰も知らないけどね。

あ、ほら、鮭、食べな」

という下川は、鍋から鮭を小皿に入れてくれた。

第七話

私は鮭を食べながら、そのふくよかな食感が、汁によく合っているのを確かめて、彼の暴論はともかくとして料理はうまいな、と感心した。

「それにしてもですね。下川さん」

声が少し大きくなった。

「うん」

「それは酷い話ですね」

「そうかね」

「そうですね」

「どう酷いのかね」

「どう酷いかっていわれると、あれなんですかね。俺は思うにやっぱりすべては狂気なんてことで片付けられてはたまらないですね。いいですか。下川さん。僕たちは生きていると同時に生かされているんですよ」

私は、不意に出たこのフレーズに自分で感動した。

「ほう。」

それで

「えっ」

「それがどうしたというのかね」

「だから、生かされている。ってことなんです」

私はその言葉から先、それ以上は思いつかなかった。ちなみに、私はいつも思いつきで生きていたから、議論もほとんど思いつきである。私と議論する相手はあまりにも私の思いつきが錯綜しているのでわけがわからなくなるみたいである。

「この話とその生かされているのがどう接続するのかね」

私はしばし黙った。もちろん、

「わかりません」

ということも容易いが、それをしてしまうのは何か嫌だ。

「だから、あれです。」

人間ってのは周囲の環境も込みで生きているわけです。

自分が。自分がって生きていると狂気かもしれないけど、周りを見ることによって、そういう狂気から逃れられるのではないかってことですね。つまり行き過ぎた自意識は人を狂わせるだけである。

と。そして、自分の周囲の人々に貢献して、他人と助け合って生きてゆきましょうね。ってことですよ」

「おお。」

いいことを言うね」

という和下川は、鍋を食べた。

多分、下川は私のこの名言を覚えていないことであろう。何故か。彼は、地理学者であるからだ。恐らく彼のシニカルな人生論も、思いつきである可能性は高い。

第八話 Mの乱

「いやあ、大変でしたねえ」

と夜勤が終わった後に、私の小説の数少ない読者の一人、バイトの同僚の、島上君が、椅子に座りながら携帯を見ながら呟いた。島上君は、背が高く痩身で、もう一人同僚から「何だかんだいってリア充」という称号を得ていた。

最近、彼は、昔のリア充だったときのころを思い出し、今は落ちぶれたものだなあ、とぼやいていたが、でもやはりリア充といわれてしまう若者であった。確かにリア充になる素質があると私も思う。もちろん、私の見立てはそんなに当てにならないし、そもそも私自身リア充の素質はまったくなかった。

「ああ、そうだねえ」

私は、ロールケーキを食べながら答えた。

「にしても、今回の『M（後輩君）の乱』を小説に書いてもいいかもしれないけど、これが難しいというか、小説に書きちゃうとそんなに面白くもないんだよね、これが」

「え、そうですかね」

「そうだよ。」

ユーモア小説みたいに書ければいいかも知れないけど。まあ、あの乱にはいろんな複雑な側面があって、それをどう書くかに掛かっていると思うよ」

「書けばいいじゃないですか。」

面白いと思いますよ」

と少し笑いながら島上君はいった。

「いいや。」

やはりモデル問題ってのがあるからね。モデルになっているM君に失礼じゃないか。まあ、別に、店長から「声を出せ」といわれて「風邪をひいているんで声出ません」って逆切れしたただけなんだけ

ど、それでもそういうことを書くといろいろ問題があるんだよ。プライバシーの観点からもよくないと俺は思うし」

「そうですか。」

「いやあ、あれはまさに天佑だと思っただけだなあ。今、庭男さんが、『さあ、小説を書くぞ』というところに、ふって沸いた名エピソードじゃないですか」

「いやあ、書けないよ。M君が知ったら傷つくよ。やはりここは黙っておいた方がいいね。俺たちが、いろいろ、『逆切れはよくないよ』と忠告しても、聞いてくれなかったなんて書けるわけがない」

「まあ、彼も、カツとなっていたんでしょっかね」

「うん。」

でも、書けないな。

俺が忠告しようとしてもM君はカツカとしていて、反論されそうな感じだったので、途中で、話がしどろもどろになってしまった、なんて書けるわけがないよ。書けないよ」

「書けませんかあ」

と島上君は一呼吸をおいてこっちを見ていった。

「って、Mの乱のことほぼ全部、書いているじゃないですか」

私も驚いた。

「あつ、書いちゃっている」

ちなみに読者よ。安心して欲しい。このMの乱は、本人が頭を冷やして店長に謝ることにより終息した。

第九話 伝説を作り続ける男M

彼のことを書いてゆくとついつい熱くなってしまうのであるが、Mという人物には「フラ」というものがあるみたいだ。この「フラ」ってのは、フラダンスの「フラ」でもあり、どことなくゆるんだもの、笑わせてくれるものである。

Mは、背は中くらいであり、にきびが少しあって、表情が豊かである。機嫌がいいときと、悪いときはすぐにわかる。そして自虐トークをやたらにかましてくる。お笑い芸人的な素質みたいなを感じてしまう。

そして、彼の最大の特徴は、恐らく無意識であろうが、どこかに必ず

「笑うポイント」
をちゃんと残してくれるところであろう。

たとえば、Mの乱。これなんかも改めて考えれば、全編ギャグなのであるが、彼は逆切れ発言をしてから、店長と他の人たちと一緒に携帯ゲームの麻雀をやって帰っている。そもそもが風邪をひいているのに、何で麻雀をやるんだろうか。仲が悪くなっているのに、何故、麻雀をやるのか。どう考えても彼にとつて得ではない。しかも、手を抜くということは一切なく、四人麻雀で二位になっている。ここでわざと負けて店長の機嫌をとるといふ作戦もあるのだろうか、そういうことは一切しないというところがMらしい。

この逆切れをしておきながらも、麻雀ゲームをやって帰る。というところが、Mという人物の謎をとく鍵になるだろう。彼にしてみれば、帰りがかったが、他の人に仲が悪いと悟らせてはいけないという判断だったのらしい。本当かどうかはわからないが、とにかく明白なのは、これは純然たるギャグであるということだ。

私はこのエピソードを思うにつれて、彼と一緒にネットのオフ会に行ったときのことを思い出す。三回一緒に行ったのであるが、彼

は一回、一回、ちゃんと笑うポイントを残してくれた。

一回目は、みんなで盛り上がって四時間くらいカラオケしたのであるが、彼は一曲も歌わずに、しかも帰らなかった。別に帰ってもいいのであるが、そういうことはせず、しかも決して歌わない。帰らないのであるなら歌えば良いし、オフ会の中には、これ以上、音を外しようもないほど音痴な人物（木暮）がいたので、そんなに音痴だとしても恥ずかしくもないのにも関わらず、無理矢理マイクを渡されても歌わなかった。しかも帰りもしなかった。後できいたら「すっごく苦痛でした」

という。

「じゃあ、帰れよ」

と思ったが、それは心の中にしまっておいた。

二回目は、ボーリング大会で、女の子がたくさんいて、結構、盛り上がったのであるが、ボーリングをやる前に、どこかの料理屋で料理を食べているときである。普段は割りとしやべるのに、Mは急にしゃべらなくなった。それで、場を盛り上げるために、いろいろと話していて、19歳の可愛い女の子の一人が

「東北地方の教師はスパルタが多い」

みたいなことを気持ちよく話していて、だんだん盛り上がってきたときである。

「いや、そんなこともないですよ。」

千葉でもすごかったですよ。

うちの高校の先生なんか平気で殴ってきましたから」

Mのこの電光石火の否定発言によって、19歳の女の子は話を続けることができず黙ってしまった。

「ええええっ！」

こいつ黙っていると思って急にしゃべりだしたら、思いつきり相手の話を遮断しているよ。

どうするんだよ。

この雰囲気」

しかも、Mはその後、自分の高校の話もせずに黙ってしまふ。
「いや。」

あんだ！せめて、話してひっぱれよ。

何だよ、それ」

私は笑いそうになった。

でも、そこでそれを突っ込んで、Mが笑ってすまさずに、本気でムキなって反論してきたら、場がこれ以上なく、すごく険悪になる。多分、Mはそこをいじられると本気で怒るタイプであろう。

やめておいた。

これは多分、ベスト判断だったと思う。

三回目は、フットサル大会をやるうということになって、参加したら、事前の練習で足を痛めて休場した。

私は学生時代に彼よりも「フラ」を持っている人間を知っていて、その人物に比べたら彼の方がまだましかもしれない。それは私の「小説中野」という小説に登場する渡部博文という人物なのであるが、渡部のことを知っているのと、Mのことは自然とすぐにわかる。多分、どこかで血が繋がっているとかあるのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8387s/>

無限夜勤

2011年5月11日11時40分発行